世界の窓①

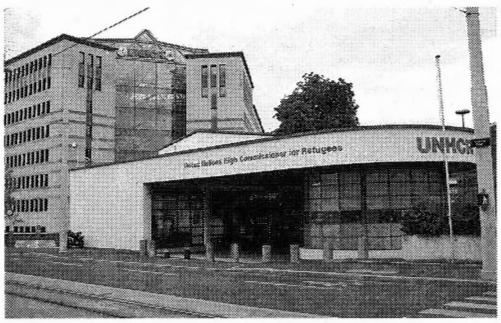
シニア・アーキビストの海外ボランティア活動

大阪大学出版会　大西　愛
Ai ONISHI

アーカイブの仕事に携わっていた私や仲間はシニアになったとき、すっかりこの仕事を離れて悠々自適という選択肢は好まなかった、できれば海外のアーカイブの実務を経験してみたいという夢を持っていた。仲間の小川千代子さんはアーカイブの国際機関で活動をしていて、国連難民高等弁務官事務所のアーカイブ課長モンセラートさんと知りあいだったことから、私たちの希望を申し出てもらったところ、同所のアーカイブを整理するというボランティアが実現した。これは、ボランティア活動の2009年から2011年までの報告である。

国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）のアーカイブ

2009年9月22日から10月2日まで2週間のボランティアが開始した。参加者は小川千代子さん（国際資料研究所）、大西（大阪大学出版会）、松村光希子さん（国立国会図書館）、秋田通子さん（宇和島市教育委員会）の4人である。国連難民高等弁務官事務所



国連難民高等弁務官事務所（撮影：金山正子）

（United Nations High Commissioner for Refugees：略称UNHCR）とはどんな仕事をするのか。高等弁務官緒方貞子さんの名前と機関名だけで、詳しくは知らない。まして、どんな資料があるかなどは全く分からない。出発する年の夏、UNHCRからの情報がメールで届いたので、東京・渋谷で勉強会を開いた。整理する資料はベトナム難民のアーカイブで、もとは香港にあったが、その後ジュネーブのUNHCR本部へ移送されたものであること。そしてFond24というナンバーが付せられ、由来についてはすでにインターネットで見られることなどが小川さんの調査でわかった。UNHCRの記録のなかでもアジア地域の資料の整理はヨーロッパのそれと比べると遅れがちのようであった。求められた作業は一言でいうと、「ISAD（UNHCR）」のFonds24完成である。UNHCRアーカイブは、ISAD（G）ではなくISAD（UNHCR）で整理している。ちなみに、日本資料はFonds50とナンバーがつけられている。

整理業務開始

メンバー4人は関西と関東と分かれているが一緒に成田から出発することにした。第1日、UNHCRの玄関は、空港並みにセキュリティチェックがきびしい。入館証を得るまではパスポートを預けないと入れない。アーカイブ課は意外とこぢんまりしたセクションで、課長以下10数人ぐらい。ボランティア作業用に会議室を2週間貸切りにして、作業室を作り、すでに資料が壁面いっぱいに運び

込まれて私たちを待っていた。

これらの資料をどのような順序で整理するかはおまかせ状態である。そこでまず現在量の把握から取りかかった。バインダーと箱に入ったバラの資料があるので、まずバインダーの目録を作成したのち、この目録と香港から運び込まれたときの複数のリストとの照合をした。不要と思われて廃棄したことが記録されているものもあるが、欠本もあり、香港から引き上げるときの担当者の困難がうかがわれた。どのリストの番号がどれにあたるか、完全には合致することがなかったが、与えられた4台のパソコンをつかって、全体を大きな1表にまとめるというのが、この年の作業の締めくくりであった。

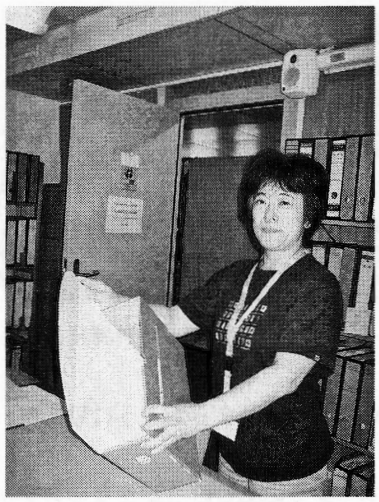
3年間の作業

はじめは、ボランティアなので8時間勤務などではなく5時間ぐらいでとモンセラート課長から言われていた。時々は早仕舞いしてすぐ隣にある国連ジュネーブ本部や赤十字博物館に出かけていた。

作業は箱の中身の確認のためには箱をおろしたり並べ替えたりと重労働がある。この課では、地下書庫のボックスを並べたり運んだりするプロフェッションがいる。したがって、運び込まれた箱の上げ下ろしもこのプロにまかせるようにとの指示があった。重労働がかなり軽減された。とはいえ作業はそんなにはかどらず、2週間の終わり頃には残業（？）までして最終にこぎつけた。

2年目の作業は2010年8月23日から9月3日までの2週間、参加は、小川千代子さんと大西と金山正子さん(元興寺文化財研究所)の3人だった。シニアでスタートしたチームは2年目から現役が参加することになった。

この年の作業はバインダーからはずしてフォルダに入れる、さらに中性紙のアーカイブボックスにいれるという体を使う労働であった。まずボックスの組み立てを教わる。バインダーは香港から船積みするために急遽集められた使い古しのものだったようで、大きさも形もまちまちで中身を十分収容できず、はみだしたり、背文字が剥がれたりと保存状態はひどかった。これらから資料をはずして中性紙のフォルダにいれる。フォルダには見出しを手書きで入れる。1フォルダは2センチ程度とし、1バインダーを2～4フォルダにわける。これらのファイルをアーカイブボックスに入れる。こうしてこの年の入れ替え作業は、全体の半分が終わった。



アーカイブボックスを組み立てる
2010年夏の作業（撮影：小川千代子）

2011年は8月29日から9月9日までの2週間。小川千代子さん、大西と秋田通子さん、金山正子さんに加えて、堀井靖枝さん（滋賀大学経済学部附属史料館）、下田尊久さん（藤女子大学）、西村直子さん（大阪大学）、元ナミさん（東京学芸大学）と大勢の参加を得た。新たに来た人はすべて現役である。人数が増えたので作業ははかどるかに見えた。

この年から作業は地下書庫で行った。前年にフォルダ＋アーカイブボックスにいれた資料の年代確定をする。これまで資料を1枚1枚めくってみることはしなかったのを初めて詳細に見ることになった。1件資料の中には様々な年号があり、どの年号をとるかを議論ののち、いわゆる文書のカガミにあたる年号だけをとることに決めた。このようにして2分の1の年代確定ができた。この作業をふまえて、今後もこのボランティア事業は継続し

副国連高等弁務官との会見　2011年9月5日午後（撮影：元ナミ）

て進めることは決まったように思える。

ジュネーブでの楽しみと参加者のスタンス

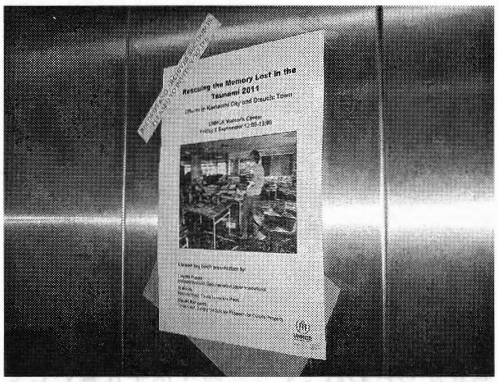
ジュネーブは国際都市である。国連をはじめ赤十字社や国際機関が多くあり、地理的にはスイスの西端にあり、ジュネーブ空港はフランスとの国境をまたいでいる。私たちも3年目は物価の高いジュネーブ市を避けて、フランス側に宿舎をとった。週末にはフランスにもスイスの各都市にも行くことができる。

私はモンブランを見渡せる峰まで登ったり、市内見学や少し足を伸ばしてアヌシー（フランス）を訪れたりした。3年目には金山さんを誘って、電車を乗り継いでインターラーケンまで1泊で行った。参加者はこのようにそれぞれ好きな行動をとる。週末だけでなく日本を出てジュネーブへ来るまでもまちまちで、直行する人も寄り道する人も、途中で他国へちょっと行く人もいる。それぞれが自分で決めて行動する。出張や学会ではなくて、ボランティアとしての醍醐味であろう。

3年目の手応え

3年目になってこのボランティアの業務には、いくつかの展開がみられた。1つめは、財団法人KDDI財団から平成23年度社会的文化的諸活動として助成金をえたことである。

2つめは、国連職員にむけて報告会をおこなったことである。2011年3月11日東日本大震災の被災状況をジュネーブの人にも知らせたいので機会がほしいと伝えていたところ、UNHCRビジターセンターの企画として「津波、失われた記録の救助」ランチタイム報告会が行われた。このタイトルは、アーカイブ課長モンセラートさんが考案し、会場にはUNHCRアーカイブ課の関係者はもとより、日本人職員、日本語ができるアイルランド人職員、周辺国際機関のアーキビスト数名もかけつけなかなか盛況であった。1被災地の様子、2「史料ネット」という組織の活動、3資料救助の手法の3報告。質問はやはり資料救助方法に関心が集まった。フリーズドライによる水損資料の修復手法は、どうやらほとんど知られていないような印象であった。

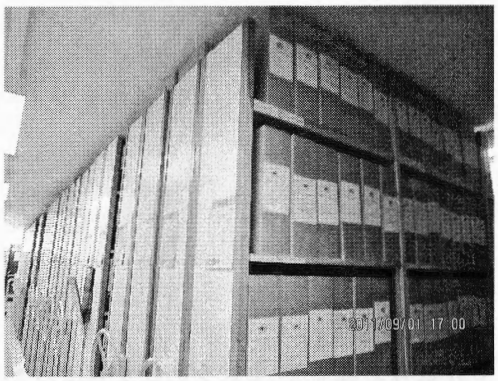


UNHCRのエレベータ内に掲示されたポスター
2011年9月（撮影：金山正子）

3つめは、このイベントを広報するポスターをエレベータ内で見たらしい、UNHCRのアレニコフ副高等弁務官から要望されて会見が実現したことである。アレニコフ氏は、日本からわざわざアーカイブ整理ボランティアに来たことに謝辞をのべ、「この仕事、ご自身にはどんなメリットがありますか？」と

東日本大震災報告会「津波、失われた記録の救助」
2011. 9. 2昼休み UNHCR ビジターセンター（撮影：元ナミ）

報告会に参加の人たち　国籍はまちまち
（撮影：元ナミ）



UNHCR 書庫の棚にならんだアーカイブ
（撮影：大西　愛）

の質問に対し「日本の公文書管理の実務との比較検討ができる、絶好の機会です。」と小川さんは返答した。

今後に向けて

このFOND24整理作業を終えるには単純計算するとあと5年はかかる。そして最終的には、書庫の他のアーカイブのようにラベルが貼られて箱が並ぶ予定である。そしてその時にはインターネット上に私たちが作ったFonds24の検索目録が掲示されるのである。はじめは名もなかったこの作業チームは、いくつかの報告のために、「シニア・アーキビスト海外ボランティア UNHCR 作業チーム」（代表：小川千代子）と名付けた。これまでの経験を生かして、アーカイブのよりよき保存と利用に貢献できれば幸いである。

目録作成作業
2011年8月（撮影：小川千代子）